

学校编码：10384

分类号_____密级_____

学 号：12220091152319

UDC_____

厦 门 大 学

硕 士 学 位 论 文

近代东亚对西方的“接受”与“解读”
——以中日两国对“自由”的翻译为中心

近代東アジアにおける西洋の「受容」と「読み換え」
——中国と日本における「自由」の翻訳を中心に

王晓雨

指导教师姓名： 吴光辉 副教授

专 业 名 称： 日语语言文学

论文提交日期： 2011 年 4 月

论文答辩日期： 2011 年 月

学位授予日期： 2011 年 月

答辩委员会主席：_____

评 阅 人：_____

2011 年 4 月

厦门大学学位论文原创性声明

本人呈交的学位论文是本人在导师指导下,独立完成的研究成果。本人在论文写作中参考其他个人或集体已经发表的研究成果,均在文中以适当方式明确标明,并符合法律规范和《厦门大学研究生学术活动规范(试行)》。

另外,该学位论文为()课题(组)的研究成果,获得()课题(组)经费或实验室的资助,在()实验室完成。(请在以上括号内填写课题或课题组负责人或实验室名称,未有此项声明内容的,可以不作特别声明。)

声明人(签名):

年 月 日

厦门大学学位论文著作权使用声明

本人同意厦门大学根据《中华人民共和国学位条例暂行实施办法》等规定保留和使用此学位论文，并向主管部门或其指定机构送交学位论文（包括纸质版和电子版），允许学位论文进入厦门大学图书馆及其数据库被查阅、借阅。本人同意厦门大学将学位论文加入全国博士、硕士学位论文共建单位数据库进行检索，将学位论文的标题和摘要汇编出版，采用影印、缩印或者其它方式合理复制学位论文。

本学位论文属于：

（ ） 1.经厦门大学保密委员会审查核定的保密学位论文，
于 年 月 日解密，解密后适用上述授权。

（ ） 2.不保密，适用上述授权。

（请在以上相应括号内打“√”或填上相应内容。保密学位论文应是已经厦门大学保密委员会审定过的学位论文，未经厦门大学保密委员会审定的学位论文均为公开学位论文。此声明栏不填写的，默认为公开学位论文，均适用上述授权。）

声明人（签名）：

年 月 日

要 旨

近代西洋の思想や文化を「受容」することは、東アジアの諸国にとって直面しなければならない共通の課題である。それは西洋への受け継ぎという形で現れており、自身の文化的伝統、あるいは時代の変容に基づき、西洋への「読み換え」や「転換」というプロセスとして現れている。「自由」という概念の翻訳活動は、まさにこのような動きの表現、あるいは縮図であると言えるであろう。

「自由」という概念は中国の古典に由来し、近代西洋から輸入されてきたので、西洋の色合いを持つもののように思われる。そのうえ、近代における日本、中国の社会思潮や思想運動の影響を受け、この概念は、西洋あるいは東洋のもともとの意味から外れてき、いっそう豊かな内容をもつようになった。言い換えれば、この概念の形成や意味転換のプロセスから、近代という時代における中日両国の思想的展開の脈絡、さらに特徴が考えられるように思われる。

上述したように、中国の古典に由来した「自由」という概念の翻訳に関しては、中国の場合、伝統と近代との峻別を明らかにし、それをキーポイントとして取り扱うべきである。中国に対して、日本の場合、「自由」という言葉が借用語としてすでに近代日本に存在している。だから、日本の場合、中国からの借用語、西洋からの概念、それに、それを受容する日本の文化的風土などの問題を扱わなければならない。したがって、この概念の「受容」や「読み換え」の過程を考えてみれば、中国と日本との異質性がはっきり現れてきたように思われる。

「自由」という概念を如何にして翻訳し、読み換えられたかは、近代の東ア

ジアにおける伝統と近代、西洋と東洋、日本と中国の関係といった問題群を考える場合、一つの象徴的な「事件」であると思われる。それは直接、近代における中国と日本の文明意識、さらに文明観念の選択に繋がっている。本論においては、近代中日両国の知識人による「自由」という言葉の翻訳活動を視点として、「自由」という言葉への多元的「読み換え」を検討し、近代における東アジアの文明観念の多元的構造を求めようとする。

キーワード：自由；翻訳；解読

摘 要

近代，对西方思想文化的“接受”乃是东亚面临的一个共同的思想主题。这样的“接受”不仅体现为对西方社会的认可与承接，还带有基于自身文化传统或者时代变革所需要的“解读”或者“转型”。“自由”这一概念的翻译可以视为这样一个文化活动的体现或者缩影。

“自由”这一概念本是来自中国古典，通过近代西方的输入，带有了西方的色彩。不仅如此，随着日本、中国各自的社会思潮及思想运动的影响，这一概念不再依存于原有的东方或者西方的本意，而是带有了多样性的内涵。换句话说，审视这一概念的形成与意义转换的过程，可以发掘出近代这一时期中日两国的思想发展脉络与基本特征。

如前所述，“自由”一词来自中国古典，在翻译这一概念的时候，中国所面对的问题在于如何处理传统与近代的问题，不过，这里的近代包括了日本的译介活动；与中国不同，“自由”这一概念是作为借词在日本近代的文脉中得以反映出来的。因此，日本需要处理的是中国借词、西方概念、日本自身的接受平台之间的问题。由此可见，中国与日本接受与解读这一概念的基础大相径庭，存在着不同的解释模式。

如何翻译、解读“自由”这一概念，折射出近代东亚是如何处理传统与近代、东方与西方、日本与中国等一系列问题，可谓是一个典型的“事件”。这与近代中日两国对文化意识及内涵的选择有着密切的关系。因此，本文的视角虽然确定为近代的知识分子的译介活动，但是其根本意义也在于通过对“自由”这一概念解读的多样化，来构建起现代东亚文化内涵多样化的一个框架或者格局。

关键词：自由；翻译；解读

目 次

序 論	1
第一節 共通の課題としての西洋への「受容」	1
第二節 先行研究と問題意識	4
第三節 本論の組立て	7
第一章 日本の知識人における「自由」の解読	9
第一節 蘭学と「自由」の翻訳	9
第二節 近代の知識人と「自由」の翻訳	10
2.1 福沢諭吉の「自由」	12
2.2 中江兆民の「自由」	15
2.3 自由民権運動における「自由」	19
第二章 中国の知識人における「自由」の理解	23
第一節 伝統の「自由」と西洋の「自由」	23
第二節 中国の知識人と「自由」の翻訳	27
2.1 嚴復の「自由」	27
2.2 梁啓超の「自由」	36
第三章 アジアにおける近代西洋の「読み換え」	43
第一節 「中体西用」と「和魂洋才」	43
第二節 近代における東アジア文化圏の「文化変容」	47
結論	51
参考文献	54
謝辞	56

目 录

序言	1
第一节 作为共同主题的近代西方的“接受”	1
第二节 先行研究与问题意识	5
第三节 本文构成	7
第一章 日本知识分子对“自由”的理解	9
第一节 兰学与“自由”的翻译	9
第二节 近代知识分子与“自由”的翻译	10
1.1 福泽谕吉的自由观	12
1.2 中江兆民的自由观	15
1.3 自由民权运动下的“自由”	19
第二章 中国知识分子对“自由”的理解	23
第一节 传统语境与西方语境下的“自由”	23
第二节 中国知识分子与“自由”的翻译	27
2.1 严复的自由观	27
2.2 梁启超的自由观	36
第三章 近代东亚对西方的解读	43
第一节 “中体西用”和“和魂洋才”	43
第二节 近代东亚文化圈发生的“文明涵化”	48
结论	51
参考文献	54
谢辞	56

序 論

第一節 共通の課題としての西洋への「受容」

十五、六世紀、羅針盤の登場によって、世界の地図が描き直された。また、産業革命の発展に従い、ヨーロッパ諸国は世界各地へ進出し始めた。農業社会の自給自足的な経済様式が壊され、世界範囲での文化交流は歴史の流れの一つとなった。東洋と西洋文化の間に、激しい衝突と融和の幕がそれより開かれた。それは日中両国だけではなく、人類文明史に対しても重大な意義を持っている。それと同時に、深い影響が残されている。

強大な欧米の諸国に直面し、東洋の諸国、とりわけ日本と中国は、家も国も失う運命に追い込まれてくる。西洋諸国に抵抗するなら、まず欧米の先進的な技術を学ばなければならない。西洋の先進的な文化を受け取り、自分自身を発展させ、欧米列強に抵抗できるような近代的な国になるのは、日本と中国にとって唯一の進路である、と両国の知識人が覚悟した。ただし、西洋の文化を受け取っていると同時に、過去の伝統文化への反省が甦られた。日中両国の伝統的な世界観や価値観に対して、西洋文化からの衝撃は避けられないものである。文化の交流、受け入れ、融和という過程は普通、長い間を通じて、多くの認識や実践をも繰り返し、それに、何世代の人たちによってずっと探し求めることによってはじめて、文化間の発展や転換を完成させることに成功したと言われている。だから、西洋の先進的な文化を受け入れること、身につけること、なお、自国の文化に根付き、芽を出させ、華やかな花としてそれを誇りにすることまで、如何にしたらよいかは、日中両国が直面しなければならない課題であ

る。

十六、十七世紀以来、西洋の学術文化が次第に東洋に伝わってきた。中国における「西学東漸」は、西洋の宣教師を中心に広がっている。宣教師が中国での布教をスムーズに進めるために、まず中国人の外国蔑視を打破しなければならない。彼らは多くの書籍を翻訳、出版し、西洋の学問を紹介しようとする。その中で、宗教以外の書物はたくさん出版されている。それゆえに、多くの新語・訳語が作られてきた。その時期に生まれた新語・訳語は、どれくらい最後まで残されたかは、なかなかわからないが、長い時間の「練磨」が必要である。その上、今の言葉には大きな影響を確かに与えている。中国と違って、その時期の日本はいわゆる戦国の時代であり、鉄砲、望遠鏡などの西洋の実物は、紛争のために取り入れられた。十七世紀以降、日中両国は相次いで鎖国した。十八世紀に清朝の政府は厳しい禁教政策を実施したとともに、西洋学問の輸入も停止の状態に陥ってしまった。日本は鎖国の政策をも実施したが、長崎を唯一の貿易港とした。それゆえに、西洋の文物は、次から次へと絶えることなく、日本に入ってきた。この時代に登場した「蘭学」は、後ほど明治維新の土台とも言われている。十八世紀の末頃、欧米列強の進出によって、日中両国はしかたなく開国した。この後、もともと「自発」という立場から西洋の学問を積極的に輸入していた東洋の諸国であるが、今度は仕方なく受身の立場に転換させられた。十九世紀六十年代ごろ、中国の清王朝で洋務運動が展開され、「中体西用」をスローガンとして掲げた。それに対して、日本においては明治維新が行われた。日中両国は富国強兵を実施するために、西洋の学問を積極的に導入し始めた。

『西風東漸——中日西洋文化摂取の比較研究』において于桂芬氏は、日中両国が西洋の学問を摂取する運動、即ち洋務運動と明治維新の比較研究を行い、

両者の相違点を次のように指摘した。「一、西洋文化を受容する場合に、明治維新は政治、経済、文化など各分野、各階層ともに西洋のものを吸収しようとする。……それに比べて、中国の洋務派は西洋文化を導入する場合、科学技術だけ興味を持っているが、社会制度や文化観念などにはまったく興味なし。……二、西洋文化を求める場合、中国と日本の姿勢が大いに違っている。」^①このような相違点によって、共に西学東漸に直面する日本と中国は、近代化を求めているうちに、それぞれの道を歩むようになった。日清戦争の時、北洋艦隊の全滅がむしろ洋務運動の失敗を宣告したが、日本はこの戦争を契機に、一躍してアジアの一等国となり、近代化を実現したアジアの最初の国家となった。

この時期、西洋文化を吸収する両国の様式と言え、留学生の派遣は言うまでもないが、西洋の書物を直接翻訳すること、或いは日本語訳を利用して中国語に翻訳することは、西洋の学問を紹介する場合、最も重要なルートの一つになった。日清戦争後、かつての「学生」に負けたという事実に刺激され、清の政府は反省し始め、西洋の文物典籍を取り入れようと主張するようになった。一八九六年、康有為は『請広訳日本書派遊学』の奏折に、「今日、日本が我国より強大になった所以は、早めに変革、早めに留学生を派遣し、早めに西洋の書籍を翻訳することから、国家の管理がよりよくできたからである。」^②と指摘した。いわゆる「書籍」、「国家の管理」とは、西洋文明についての書物や法律制度のことを指している。明治維新を通じて日本は、近代西洋の先進的な制度を学び、文明開化を推進し、一躍にアジアトップの国家となった。だから、西洋文明を習うために、留学先を考える場合、日本が一番良い所である、と中国の知識人たちは考えている。それに、西洋文明について日本はすでに多くの訳

^① 于桂芬，西風東漸——中日摄取西方文化的比较研究[M]，北京：商务印书馆，2001，第8页。

^② 汤志均编，康有为论政集[M]，北京：中华书局，1981，第302页。

本を出版したが、それは言うまでもなく、中国人が西洋を見、西洋を考える窓口の一つになった。

このような背景のもとで、西洋の思想や文化への「受容」は、近代における東アジアが直面しなければならない共通な課題となった。それは西洋への受け継ぎという形で現れており、自身の文化的伝統、あるいは時代の変容に基づき、西洋への「読み換え」や「転換」というプロセスとして現れている。「自由」という概念の翻訳活動は、まさにこのような動きの表現、あるいは縮図であると言えるであろう。「自由」という概念がこの時期に近代知識人によって注目されたが、現代に至るまで、ヨーロッパ文明の根本的な精神として考えられている。というのは、「自由」の力によって人間の知恵が十分に生かされ、欧米社会には、無限の発展の可能性が与えられたからである。

「自由」という言葉は、もともと中国の古典から由来したが、今の概念として登場したのは、実は近代になってから西洋を通じて輸入されたのである。それによって、この概念には、東洋・西洋の多くの色合いが付けられた。そのみならず、日中両国における各自の社会思潮や思想運動の事情によって、この概念は、むしろもともとの意味づけから離れ、いっそう豊かな意味をもつようになった。言い換えれば、この概念の形成過程や意味転換を中心に考察すれば、近代という時点における日中両国の思想的脈絡やそれぞれの特徴は明らかにするのではないかと筆者には思われる。

第二節 先行研究と問題意識

「自由」という語についての先行研究といえば、言語学、翻訳学、思想史な

ど数多くの立場が取り上げられる。まず、言葉の由来を考える場合、「自由」という言葉は、中国古典に由来し、各時代を経て、特に晩清以降、「liberty」と「freedom」の訳語として現代中国語の「自由」と意味づけられた。このような先行研究という、周振鶴氏の『自由”从哪里来』、胡其柱氏の『“自由”语词的前世今生』と『晩清“自由”语词的生成考略』などが挙げられる。また、西洋から伝来した新しい思想の根本的な概念として、近代における日中両国は如何にしてそれを受容したか、という先行研究は、より多く行われている。まず、「自由」という概念それ自体を考える場合、日中両国のいわゆる立場がまったく違っている。中国の場合、この概念が古典から出てきたので、それを翻訳する時、どのように伝統と現代の問題を考えるかは一つの大きな問題となっている。それに、日本からの訳本、あるいは日本によって作られた言葉なのかという問題も残されている。中国と違って、「自由」が借用語として近代日本の文脈に存在している。だから、日本の場合には、中国からの借用語、西洋からの概念、受容の本体としての日本自身、その三つの「根源」から意味争奪の問題を解決しなければならない。要するに、日中両国が「自由」を受容する土台は大いに違い、理解の様式も必ずしも同じではない。このような研究といえば、たとえば、『“国家”与“个人”之间——略论晚清中国对“自由”的阐述』において章清氏は、「自由」を「国家」と「個人」の矛盾の中心的概念として近代中国での発展過程を論述した。「自由」は訳語として、多くの場合が自由主義と緊密につながっているが、近代における「自由」の翻訳に対する研究も自由主義への紹介を兼ねている。「自由」を手段として利用している福沢諭吉、「自由」を儒学の組立てに置かれた中江兆民、「自由」を慎重に紹介している嚴復、積極的に「自由」を唱えている梁啓超。西洋であれ、日本であれ、中国であれ、「自由」は近代という特殊な時代において、個人、国家の存在にか

かわる中心的な概念として、知識人たちによって翻訳され、紹介されるようになった。むしろ自由という言葉の翻訳や紹介は、東アジアの近代思想史の一表現とも言えるであろう。『中国の近代化と知識人：嚴復と西洋』においてシュウォルツは、嚴復という人物を中心に、なぜ自由主義が近代中国で失敗したかと、功利主義の立場から自由主義を紹介した嚴復のことから、少しでも察知できると指摘した。それに対して、台湾の学者黄克武氏は『自由之所以然——嚴復対約翰弥尔自由主義思想的認識与批判』において、シュウォルツの見解に反対し、伝統の文脈における嚴復の言語体系を論述している。また、柳父章氏の『翻訳とは何か』においても、「自由」という訳語を論述した。「自由」を「liberty」「freedom」の訳語とするのが適切ではないと言い、明治時代の日本知識人の心境をも指摘した。鈴木真美氏が『明治期日本の啓蒙思想における「自由・平等」——福沢諭吉、西周、加藤弘之をめぐって』において、「自由」という訳語の由来や確立を分析し、福沢諭吉、西周、加藤弘之らによる「自由」の理解をも論述した。

「自由」という言葉の翻訳や「読み換え」は、伝統と現代・東洋と西洋・日本と中国などの問題にかかわり、思想界によって注目されている。一九九一年に出版された『嚴復与福沢諭吉——中日啓蒙思想比較』において王中江氏は、文化、思想、実践という三つの方面から嚴復と福沢諭吉を比較しながら、両者がその時代の思想啓蒙家として果たした役割をそれぞれ論述した。その後、すなわち一九九六年に発表された『中日近代対西方政治哲学思想的摂取』においては、進化論を受容した加藤弘之、自由の思想を受容した嚴復、『自由論』を翻訳した中江正直、この三者の「自由」への受容の様式、それぞれの理解、さらに各自の特徴を考察した。言うまでもなく、国情によって、外来思想への選択や調和が違っている。このような横の研究方向と異なり、于桂芬氏は『西風東

漸——中日摂取西方文化的比較研究』において、縦の方向、すなわち十六世紀から二十世紀にかけて西洋文明を摂取する日中両国の歴史を比較し、そこから日中両国の近代化の成敗得失を明らかにした。

本論においては、近代知識人の翻訳活動を中心として考察し、研究を推し進めるが、「自由」への多様な「読み換え」を通じて、近代における東アジア文化の内在的多様性の構造を組み立てようとするのは、本論の真の意図である。

第三節 本論の組立て

本論は三つの章からなる、それぞれ、日中両国の知識人による「自由」への解読を分析し、東アジアにおける近代西洋への理解をめぐって考察を行った。

まず、第一章では、蘭学から発足した西洋への受容、日本の知識人が「自由」という訳語を如何にして理解したかという問題をもとにして、その概念及びその周辺を論じる。その中で、「自由」という言葉の翻訳、自由思想を受容する様式を分析することによって、近代日本が西洋文化を受容する時、さらに外来文化を受容する行動様式を求めようとする。

第二章では、中国の知識人を中心に、西洋の受容、日本の受容、両者が混同して近代中国において、自由という言葉はどのように紹介され、解釈されたかを考察する。そこから、古くからの中華思想のもとで、外来文化からの衝撃を受けた中国の知識人の反応を分析し、近代中国人の思惟構造、行動様式を求めようとする。

第三章では、近代の日中両国がどのように西洋を受容したか、という問題に注目し、「中体西用」と「和魂洋才」というスローガンを掲げ、比較研究を試みる。さらに、同じ東アジアの文化圏において、日中両国がなぜそれぞれの近

代化への道を歩んできたかという問題を念頭に置き、両者の思想的根源、さらに文化的特質を論述する。

結論として、「自由」はただ「liberty」や「freedom」の訳語として存在しているのみならず、西洋思想の中心的な概念として東洋の知識人たちによって受け入れられた。この概念への解説や紹介は、日本にとっても中国にとっても共に複合的な存在である。そこから、近代という時点において、西洋と東洋、日本と中国、如何にして「一つのもの」——「世界」あるいは「東アジア」——になったのかは、むしろこの「自由」という言葉から何かの手がかりが見出されるように思われる。

Degree papers are in the "[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)". Full texts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to etd@xmu.edu.cn for delivery details.

厦门大学博硕士论文摘要库